

吳壇『大清律例通考』と「太監高雲從洩漏記載」事件

高遠 拓児

はじめに

本章では、清代の律例について学ぶ際に裨益するところの大きい、吳壇『大清律例通考』を主に取り上げる。周知の通り、清律は、その多くが明律を踏襲したものであるが、清代前期にはいくらかの条文が追加あるいは削除されるなどの出入りがあり、条文の文言に手が増えられた箇所もある。また清律に付される条例は、明の『問刑条例』を受けつぎながら、清代後期に至るまで新しい条例の追加や既存の条例の修正・削除が重ねられ、時々刻々その姿を変えるものとなった¹⁾。清代の律例は、乾隆五年（一七四〇）に『大清律例』として刊行されたが、それ以前はもとより、その後においても数年ごとに繰り返される条例編纂によって、その内容は常に改められていたのである。『大清律例』という同一の書名であっても、編纂時期によって収録される条例の数や内容に相違があることには、十分注意をしなければならない。

このため、我々が清代の律例を史料として取り扱う際には、律例の個々の条文の成り立ちや変遷をできる限り正確に把握する作業が求められる。しかし、清代の膨大な史料を国初にまで遡って、あるいは明代以前にまで搜索の範囲を広げて、一つ一つの条文に関わる記録を探し出し、その経緯をたどるのはきわめて困難な作業となる。しかし幸いなことに、このような律例編纂史の整理に意を用いた書物が、清代の律学家たちによって編まれている。かかる書物としては清末に成立した薛允升『読例存疑』がよく知られているが、この書物は将来的な律例の改訂を視野に、律例

の編纂経緯と得失を論じたものであり、前者の編纂経緯のみを主眼として編まれた本ではない。加えて清初から清末に至る長期間を対象とするため、個々の条文の変遷については適宜要約しつつ記される傾向がある。我々が律例編纂の経緯を把握するには、『読例存疑』以前に成立していた呉壇『大清律例通考』や呉坤修等『大清律例根原』なども参照するのが望ましい。本章では、乾隆四十年代に成立した『大清律例通考』とその著者呉壇に関わる史料を取り上げることとする。

以下本章では、まず『大清律例』の最初の律として置かれる名例律の五刑律について、『大清律例通考』の掲げる律文（律の原文）と按語（呉壇の付した考察の言葉）を引いてその読解を試みる。ついで本書の序に相当する呉重憲「律例通考校刊縁起」を引き、著者呉壇の経歴と本書著述の背景について考察する。そして乾隆三十九年（二七七四）に起こった「大監高雲從洩漏記載」という事件に関する檔案史料を提示する。この事件は呉壇の経歴にも大きな影響を与えた出来事である。

なお、本章で取り上げた史料の訳出に当たって、主に利用した辞典類は、卓上版では鎌田正・米山寅太郎『新漢語林』（大修館書店、二〇一二年第二版）、愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』（大修館書店、一九八七年増訂第二版）、大型の辞典では諸橋徹次『大漢和辞典』（大修館書店、一九八九・九〇年修訂第二版）、漢語大詞典編輯委員会・漢語大詞典編纂処編『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社、一九九七年縮印本）、大東文化大学中国語大辞典編纂室編『中国語大辞典』（角川書店、一九九四年初版）である。清代の史料では、公文書であっても口語的な言い回しや熟語が用いられることが多いため、古典漢文を読むのに適した『新漢語林』や『大漢和辞典』に加えて、白話小説等から多くの語彙を採っている『中日大辞典』、『中国語大辞典』も参考になる。『漢語大詞典』は古典・白話を問わない膨大な語彙数が特徴である。この他に参照した一定の分野に特化した辞典については、その都度指摘することにする。なお、辞典の選択や扱い方には一つの正解があるわけではなく、研究者の数だけメソッドがあるといっても過言ではない。これから研究の

道に進む方には、ぜひ様々な辞典類を手にとって、それぞれの特徴や癖を知り、自分なりの扱い方を模索していったらいい。

一 吳壇『大清律例通考』五刑律文・按語

標点文 吳壇『大清律例通考』卷四・名例律上（按語の段落分けは引用者による。また、「」は割註を指す）

五刑律文

笞刑五「笞者擊也。又訓爲恥。用小竹板」。一十「折四板」、二十「除零折五板」、三十「除零折一十板」、四十「除零折一十五板」、五十「折二十板」。

杖刑五「杖重於笞。用大竹板」。六十「除零折二十板」、七十「除零折二十五板」、八十「除零折三十板」、九十「除零折三十五板」、一百「折四十板」。

徒刑五「徒者奴也。蓋奴辱之」。一年杖六十、一年半杖七十、二年杖八十、二年半杖九十、三年杖一百。

流刑三「不忍刑殺。流之遠方」。二千里杖一百、二千五百里杖一百、三千里杖一百。

死刑二。絞、斬「内外死罪人犯、除應決不待時外、餘俱監固、候秋審・朝審分別情實・緩決・矜疑、奏請定奪」。

謹按、『孝經援神契』云「聖人制五刑、以法五行」、《禮》云「刑者側也、成也」⁽²⁾。一成而不可變。故君子盡心焉。五刑之始、見於虞書、曰「象以典刑」、又曰「五刑有服、五服三就」。註謂「墨・劓・剕・宮・大辟也」。三代相承、尤莫詳於『周官』司寇之制。蓋皆肉刑也。自漢文帝除肉刑、延至隋唐、乃以笞・杖・徒・流・死定爲五刑。歷代因之、至今不改。其笞刑五、即虞書所謂「扑作教刑」者也。其杖刑五、即『國語』所謂「薄刑用鞭朴」⁽³⁾、而虞書所謂「鞭作官刑」者是也。其徒刑則始於周。『周禮』云「其奴男子入於罪隸」、又「任之以事、實以圜土、而收教之。上罪三年而

捨、中罪二年而捨、下罪一年而捨⁽⁴⁾、竝徒刑也。而今律則更析爲五等矣。其流刑則肇自唐虞。『書』曰「流宥五刑」、又曰「五流有宅、五宅三居」。今之三流、卽其義也。斬·絞之坐、刑之極也。『春秋元命包』云「黃帝斬蚩尤於涿鹿之野」。『禮』云「公族有死罪⁽⁵⁾、則磬於甸人」〔註綏之如縣樂器之磬也〕。可知斬自軒轅、絞興周代。二者皆古大辟之刑也。

查唐明原律、笞·杖各條下、俱註贖刑數目、順治·康熙年間律內無。雍正三年館修、始將應贖銀數開列前圖。又國初律笞杖數目下原註以五折十。康熙年間現行則例、始以四折十、併除不及五之零數。故杖一百止折責四十板。雍正三年館修、乃改註折四·除零等語。其笞刑下小註「笞者擊也。又訓爲恥」、徒刑下小註「徒者奴也。蓋奴辱之」、流刑下小註「不忍刑殺。流之遠方」等句、係順治年間採『唐律疏議』。乾隆五年館修、併補入「用小竹板」、「杖重於笞。用大竹板」字樣。

再查條末註、原律內開「除罪應決不待時外、其餘死罪人犯、撫按審明承招具題、部覆、奉旨依允監固、務於下次巡按御史再審、分別情真·矜疑兩項、奏請定奪」等語。至雍正三年館修、始將情真眞字改爲情實字樣。又緣順治十八年已將巡按審錄之例停止、止准該撫照例舉行。康熙四年題准、直省秋審、該撫會同總督審錄。故將「撫按審明」及「下次巡按御史再審」等句刪除。又查、順治十年始舉行朝審之例、卽分爲情真·緩決·矜疑三項。順治十五年題准、各省秋審亦照在京事例、詳審分別三項具奏。是以雍正三年館修、併將緩決一項一併修入、纂如前註。其一切秋審·朝審條例、俱列斷獄門有司決囚等第條內。應參觀。

<p>五刑律文</p>		<p>集入</p>	
<p>笞刑五 笞者擊也又訓為恥用小竹板</p>		<p>杖刑五 杖重於笞用大竹板</p>	
<p>一十 折四板</p>		<p>六十 除零折二十板</p>	
<p>三十 除零折一十板</p>		<p>七十 除零折三十五板</p>	
<p>五十 折二板</p>		<p>九十 除零折三十五板</p>	
<p>徒刑五 徒者奴也</p>		<p>杖刑五 杖重於笞用大竹板</p>	
<p>一十 折四板</p>		<p>六十 除零折二十板</p>	
<p>三十 除零折一十板</p>		<p>七十 除零折三十五板</p>	
<p>五十 折二板</p>		<p>九十 除零折三十五板</p>	
<p>流刑三 流之遠方</p>		<p>杖刑五 杖重於笞用大竹板</p>	
<p>一千里杖一百</p>		<p>六十 除零折二十板</p>	
<p>二千里杖一百</p>		<p>七十 除零折三十五板</p>	
<p>三千里杖一百</p>		<p>九十 除零折三十五板</p>	
<p>死刑二</p>		<p>杖刑五 杖重於笞用大竹板</p>	
<p>一千里杖一百</p>		<p>六十 除零折二十板</p>	
<p>二千里杖一百</p>		<p>七十 除零折三十五板</p>	
<p>三千里杖一百</p>		<p>九十 除零折三十五板</p>	

『大清律例通考』卷四・名例律上・五刑（一丁裏～三丁表）

（中央大学図書館所蔵、請求記号：M322.22/D27）

之坐刑之極也春秋元命包云黃帝斬蚩尤於涿鹿之野禮云公族有死罪則磬於甸人註鑑之如縣樂器之磬也可知斬自軒轅絞與周代二者皆古大辟之刑也查唐明原律笞杖各條下俱註贖刑數目順治康熙年間律內無雍正三年館修始將應贖銀數開列前圖又

國初律笞杖數目下原註以五折十康熙年間現行則例始以四折十併除不及五之零

數故杖一百止折責四十板雍正三年館修乃改註折四除零等語其笞刑下小註笞者擊也又訓爲恥徒刑下小註徒者奴也蓋奴辱之流刑下小註不忍刑殺流之遠方等句係順治年間採唐律疏議乾隆五年館修併補入用小竹板杖重於笞用大竹板字樣再查條末註原律內開除罪應決不待時外其餘死罪人犯撫按審明承招具題部覆奉

旨依允監固務於下次巡按御史再審分別情真矜疑兩項奏請

定奪等語至雍正三年館修始將情真真字改爲情實字樣又緣順治十八年已將巡按審錄之例停止止准該撫照例舉行康熙四十年題准直省秋審該撫會同總督審錄故將撫按審明及下次巡按御史再審等句刪除又查順治十年始舉行

朝審之例卽分爲情真緩決矜疑三項順治十五

年題准各省秋審亦照在京事例詳審分別三項具奏是以雍正三年館修併將緩決一項一併修入纂如前註其一切秋審朝審條例俱列斷獄門有司決囚等第條內應系觀

五刑第一條例文

一凡笞杖罪名折責概用竹板長五尺五寸小竹板大頭闊二寸五分小頭闊一寸重不過一筋半大竹板大頭闊三寸小頭闊一寸五

訓読文

五刑律文

笞刑は五つ「笞は撃なり。また訓みて恥と爲す。小竹板を用ゐる」。一十「四板に折す」、二十「零を除き五板に折す」、三十「零を除き一十板に折す」、四十「零を除き一十五板に折す」、五十「二十板に折す」。

杖刑は五つ「杖は笞より重し。大竹板を用ゐる」。六十「零を除き二十板に折す」、七十「零を除き二十五板に折す」、八十「零を除き三十板に折す」、九十「零を除き三十五板に折す」、一百「四十板に折す」。

徒刑は五つ「徒は奴なり。蓋し之を奴辱す」。一年杖六十、一年半杖七十、二年杖八十、二年半杖九十、三年杖一百。流刑は三つ「刑殺するに忍びず。之を遠方に流す」。二千里杖一百、二千五百里杖一百、三千里杖一百。

死刑は二つ。絞、斬「内外死罪人犯、應決不待時を除くの外、餘は俱に監固し、秋審・朝審を候ち、情實・緩決・矜疑に分別し、定奪を奏請す」。

謹みて按ずるに、『孝經援神契』に云ふ「聖人は五刑を制め、以て五行に法る」と、『禮』に云ふ「刑は例なり、成なり。一たび成せば變ず可からず。故に君子は心を焉に盡くす」と。五刑の始は、虞書に見え、曰く「象を典刑と以す」、又曰く「五刑に有服し、五服を三つに就く」と。註に謂ふ「墨・劓・剕・宮・大辟なり」と。三代相承け、尤も『周官』司寇の制より詳かなる莫し。蓋し皆な肉刑なり。漢文帝、肉刑を除きてより、延きて隋唐に至りて、乃ち笞・杖・徒・流・死を以て定めて五刑と爲す。歷代之に因り、今に至るも改めず。其れ笞刑は五つ、即ち虞書の所謂「扑を教刑と作す」者なり。其れ杖刑は五つ、即ち『國語』の所謂「薄刑は鞭扑を用ふ」、而して虞書の所謂「鞭を官刑と作す」者なり。其れ徒刑は則ち周より始まる。『周禮』に「其の奴、男子は罪隸に入る」と、又「之に任ずるに事を以てし、眞くに圜土を以てし、收めて之を教ふ。上罪は三年にして捨し、中罪は二年にして捨し、下罪は一年にして

捨す」と云ふは、竝な徒刑なり。而して今の律則ち更に析かちて五等と爲す。其れ流刑は則ち唐虞より肇まる。『書』に曰く「流は五刑を宥む」と、又曰く「五流に有宅し、五宅三つに居く」と。今の三流、即ち其の義なり。斬・絞の坐は、刑の極みなり。『春秋元命包』に云ふ「黃帝、蚩尤を涿鹿の野に斬る」と。『禮』に云ふ「公族、死罪有れば、則ち甸人に磔す」「之を縊ること樂器の磬を縣けるが如しと註す」と。斬は軒轅より、絞は周代に興るを知る可し。二つは皆な古の大辟の刑なり。

査するに唐明の原律、笞・杖各條下、俱に贖刑數目を註すも、順治・康熙年間の律内には無し。雍正三年館修し、始めて應に贖すべき銀數を將て前圖に開列す。又國初の律の笞・杖數目下の原註は五を以て十を折す。康熙年間の現行則例、始めて四を以て十を折し、併せて五に及ばざるの零數を除く。故に杖一百は折して四十板を責むるに止む。雍正三年館修し、乃ち改めて「折四」「除零」等の語を註す。其れ笞刑下の小註「笞は擊なり。また訓みて恥と爲す」、徒刑下の小註「徒は奴なり。蓋し之を奴辱す」、流刑下の小註「刑殺するに忍びず。之を遠方に流す」等の句は、順治年間に『唐律疏議』より採るに係る。乾隆五年館修し、併せて「小竹板を用ゐる」、「杖は笞より重し。大竹板を用ゐる」の字樣を補入す。

再査するに條末註、原律内開すらく「罪、應決不待時を除くの外、其餘の死罪人犯は、撫按審明し招を承けて具題し、部覆し、旨を奉じて監固を依允せらるれば、務めて下次巡按御史の再審に於いて、情眞・矜疑の兩項に分別し、定奪を奏請す」等の語。雍正三年の館修に至つて、始めて「情眞」の「眞」字を將て改めて「情實」の字樣と爲す。又順治十八年、已に巡按審錄の例を將て停止するに緣り、止た該撫の例に照らして舉行するを准す。康熙四年題准して、直省の秋審、該撫は總督と會同して審錄せしむ。故に「撫按審明」及び「下次巡按御史再審」等の句を將て刪除す。又

査するに、順治十年、始めて朝審の例を舉行し、即ち分ちて情眞・緩決・矜疑三項と爲す。順治十五年題准して、各省秋審も亦た在京事例に照らして、詳審し三項に分別して具奏せしむ。是を以て雍正三年館修し、併せて緩決一項を將て一併に修入し、纂すること前註の如し。其れ一切の秋審・朝審の條例は、俱に斷獄門の有司決囚等第條内に列す。應に參觀すべし。

演習に臨んで

『大清律例通考』は、上記のように律例の個々の条文について、その由来や変遷を解説した書物である。本書の著者吳壇については次節にて詳しく述べるが、乾隆年間に刑部右侍郎や江蘇巡撫などを歴任した官僚で、本書は乾隆四十二年（一七七八）までにまとめられ、その翌年の情報を追補している。したがってそれ以降の条例編纂については、前述の『大清律例根原』や『読例存疑』など、別の情報源を用いた調査が必要となるが、乾隆中期までの律例の沿革を知る際には、まず手に取るべき本である。

本書については、張偉仁主編『中国法制史書目』（中央研究院歷史語言研究所、一九七六年）や谷井俊仁「清律」（滋賀秀三編『中国法制史―基本資料の研究―』東京大学出版会、一九九三年）に簡潔な紹介があるほか、洪丕謨『中国古代法律名著提要』（浙江人民出版社、一九九九年）にも解題が収録されている。版本としては、吳壇の玄孫吳重意が光緒十二年（一八八六）三月に記した「律例通考校刊緣起」を巻頭に置く木版本を、国立国会図書館・東京大学東洋文化研究所・東京大学法学部・京都大学人文科学研究所・京都大学法学部・中央大学図書館が所蔵^⑥するほか、台湾の複数機関が所蔵している^⑦。『大清律例通考』の版本としては、この光緒十二年本がもっとも広く流布した本とみられる。一九九二年には、この光緒十二年本を底本として、多くの註を附した馬建石・楊育棠主編『大清律例通考校注』が中国政法大学出版社より出版されている。なお、中国政法大学図書館編『中国法律圖書総目』（中国政法大学出版社、一九九一

年)によると、乾隆四十三年(一七七八)や光緒三年(一八七七)の刊本が存在することだが、その所蔵機関等は不詳である。

以下、引用史料を読解する上でのキーワードについて、見ていこう。

〈五刑〉 吳壇の按語に述べられるように、五刑には古代以来変遷があつたが、隋唐以降、笞・杖・徒・流・死の五つの刑罰を五刑というようになり、これが明律・清律にも踏襲された⁽⁸⁾。五つの笞刑、五つの杖刑、五つの徒刑、三つの流刑、二つの死刑の計二十の刑罰は、刑罰の軽重を示す二十の等級ともなり、五刑律の本文はこれを列示したものとになっている。この五刑は個々の犯罪と対応する刑罰について定めた律や条例の前提となるものであったから、律の総則的規定を取めた名例律の第一条にこの律が置かれたのである。ただし、清代にはこの五刑以外に、首かせをして一定期間衆目にさらす枷号、実質的に流刑と死刑の間に位置づけられた充軍・發遣、斬を上回る極刑として置かれた凌遲処死など、五刑律の規定外の刑罰も行われていた点には注意しておきたい⁽⁹⁾。

〈笞刑〉〈杖刑〉 清律は、唐律の笞一十・笞二十・笞三十・笞四十・笞五十、杖六十・杖七十・杖八十・杖九十・杖一百という刑罰を、名称の上ではそのまま受けついだが、小註(律に付す註を小註という)に記されるように、額面通りの笞打ち、杖叩きが行われたわけではなかった。吳壇の按語第二段によると、これらの刑罰は、国初には回数を手掛けして板で打つ刑として執行され、その後、康熙年間に四掛けに改められ、笞一十を四板とする以外は、五の倍数に満たない端数は切り捨てとすることになったという。笞二十の四掛けは八であるが、これによって端数を切り捨てて五板となるのである。なお、執行に当たって用いられる刑具については、この五刑律に附される条例に規定された。前近代の中国では、このように刑罰の名と、実際に執行される刑が異なる場合がしばしばあり、この点にも気をつけておきたい。

〈徒刑〉〈流刑〉 徒刑は省内の駅通に配して労役につかせるものとされたが、やがて駅通での労役は形骸化し、ひと

つの省内で罪人を一定期間、郷里から引き離して配流する刑罰となった。また流刑は当初、罪人を僻遠の地に流す刑罰とされたが、乾隆期に辺境に限らず内地を広く用いて罪人を他省に配流する刑罰に再編された¹⁰⁾。

〈死刑〉絞および斬の死刑は、判決が定まった後、ただちに処刑するもの（応決不待時・立決）と、執行をしばらく猶予し、改めて執行・減刑の可否を定める秋審・朝審という審議にかけるもの（監候）に分別された。情実（情真）は罪情が真実にして執行妥当とするもの、緩決は執行を猶予した状態を継続するもの、矜疑は罪情に矜れむべき点があるものと罪情に疑うべき点があるもので、それぞれ減刑妥当とされた¹¹⁾。

〈孝經援神契〉〈禮〉礼記。〈虞書〉虞の史官の作とされる『尚書』の堯典・舜典・大禹謨・皋陶謨・益稷の五編。〈周官〉周礼。〈國語〉〈周禮〉〈書〉書經、尚書。〈春秋元命包〉『大清律例通考』では、この五刑律の按語のように、儒教の經典などの古典に淵源を求める議論が展開される場合がある。古典の真贋や内容の真偽についてはひとまず措き、当時の律学家が法律の背景をどのように理解していたのかといった観点から、この按語に展開されるような議論もおさえておきたい。なお、この按語の第一段に展開される議論は、吳壇の全くの独創ではなく、中国の伝統的な律学に根ざしたものである。具体的には、ここに引かれる古典の多くは、『唐律疏議』名例律の疏議にもほぼ同文で引かれており、吳壇は唐以前の律の由来について、主として『唐律疏議』に依拠しながら按語をまとめているのである。このため『大清律例通考』を読む際には、『訳註日本律令』唐律疏議訳註篇（東京堂出版、一九七九／九六年）なども手元に備えておくとよい。また、中村正人・唐律疏議講読会による『唐律疏議』の現代語訳も進行しており、こちらにも目を配っておきたい。『大清律例通考』に限らず、中国の士大夫の文章にはしばしば古典が引かれるので、十三經注疏や新釈漢文大系なども折に触れて確認できるようにしておくともいだろう。本章では『十三經注疏 整理本』（北京大学出版社、二〇〇〇年）と新釈漢文大系の『礼記』『国語』『書經』（明治書院、『礼記』一九七一〜七九年、『国語』一九七五〜七八年、『書經』一九八三〜八五年）をそれぞれ参照した。

按語に引用される『孝經援神契』や『春秋元命包』は、經書に仮託して事の吉兆禍福などを論じた緯書的一種である。いずれも散逸して原書は伝わらない。按語中の引用文は、それぞれ『唐律疏議』にも全くの同文で載っているのに、吳壇はそこから引いたのであろう。なお、中村璋八・安居香山『重修緯書集成』（明徳出版社、一九七一九二年）には、この二書の佚文が収められており、『孝經援神契』については同じ文言を確認することができるが、『唐律疏議』と『大清律例通考』が引く『春秋元命包』の文言（黃帝斬蚩尤於涿鹿之野）は見当たらない。

〈五刑有服〉〈五流有宅〉これらは「五刑に服有り」「五流に宅有り」とも読めるが、ここでは「有」を語助として「五刑に有服し」「五流に有宅し」と訓じる新釈漢文大系『書経』堯典の読みに従った。なお、ここでの服は附す、宅は置くの意である。

〈館修〉この「館」は律例館を指す。律例館はその名の通り、律例の修訂を主な職務とする機関であり、初め独立した機関であったが、乾隆七年（一七四二）に刑部の所屬となった（¹²）。その律例館による律例の修訂のことを「館修」という。

〈將應贖銀數開列前圖〉この「前圖」は『大清律例』に附される納贖諸例図などの贖に関わる諸図を指す。これらの図は『大清律例通考』では卷二に収録されている。

〈撫按〉〈部覆〉「撫」は巡撫、「按」は巡按御史の略。「部覆」は六部のいずれかによる覆議・覆審を指す。ここでは刑部による覆審である。

〈情眞〉が〈情實〉と改められたのは、雍正帝の諱「胤禩」を避けるためである。これを避諱と言うが、避諱について解説し、各種の諱を例示した古典的な工具書が陳垣『史諱舉例』（燕京大学燕京學報編輯會、一九二八年初版。一九五六年重印）である。なお『史諱舉例』では、「胤禩」について「胤」字、「禩」字そのものが避けられる例を挙げているが、この「眞」字のように文字の旁が避けられる例もある。

〈刪除〉律例の条文や字句を削除することを「刪除」という。

〈斷獄門有司決囚等第〉刑律・斷獄・有司決囚等第律を指す。覆審制などの裁判手続きについて定めた律であるが、清代を通じて多くの条例がこの律に附されていた⁽¹³⁾。

現代語訳

五刑律文

答刑は五つ「答とは撃つことである。また恥という意味もある。小竹板を用いる」。一十「四回の板打ちに輕減する」、二十「端数を切り捨て五回の板打ちに輕減する」、三十「端数を切り捨て十回の板打ちに輕減する」、四十「端数を切り捨て十五回の板打ちに輕減する」、五十「二十回の板打ちに輕減する」。

杖刑は五つ「杖は答より重い。大竹板を用いる」。六十「端数を切り捨て二十回の板打ちに輕減する」、七十「端数を切り捨て二十五回の板打ちに輕減する」、八十「端数を切り捨て三十の板打ちに輕減する」、九十「端数を切り捨て三十五回の板打ちに輕減する」、一百「四十回の板打ちに輕減する」。

徒刑は五つ「徒とは奴僕である。けだしこれを奴僕として辱しめるものである」。一年杖六十、一年半杖七十、二年杖八十、二年半杖九十、三年杖一百。

流刑は三つ「処刑するに忍びず。これを遠方に流すものである」。二千里杖一百、二千五百里杖一百、三千里杖一百。死刑は二つ。絞、斬「京師と地方の死罪の罪人は、ただちに処刑するものを除き、それ以外は皆な監禁し、秋審・朝審にて情実・緩決・矜疑に分けるのを待ち、上奏して皇上のご裁斷を請う」。

謹んで按ずるに、『孝經援神契』^{えんしんけい}に「聖人は五刑を定め、それによって五行にのつとるのである」と言い、『礼記』

に「刑とは劓(けい)(型)であり、事を成すということである。ひとたび決めたら変えることはできない。それゆえ君子は心を尽くすのである」(『礼記』王制)と言う。五刑の始まりは、虞書に見え、「象刑(しやうけい)(服装を常人と異にして罪を表す)を常の刑とする」(『尚書』舜典)と言い、また「五刑に附し、五刑に附したものは三箇所に置く」(同上)と言う。注に「墨・劓・剕・宮・大辟である」と言う。夏殷周の三代はこれを継承し、とりわけ『周官』の司寇の制より詳しいものはない。けだしすべて肉刑である。漢の文帝が肉刑を廃止してから、隋唐に至って、笞・杖・徒・流・死を五刑と定めた。歴代これを踏襲し、今日まで変わっていない。笞刑は五つであり、虞書のいわゆる「扑(教鞭)を教育の刑罰にもちいる」(『尚書』舜典)である。杖刑は五つであり、『国語』のいわゆる「軽微な刑罰には鞭と杖を用いる」(『国語』魯語)、そして虞書のいわゆる「鞭を官吏の刑罰にもちいる」(『尚書』舜典)である。徒刑は周より始まる。『周礼』に「その奴、男子は罪隸(罪を得て官奴とすること)に入る」(『周礼』秋官司厲)、また「(人に危害を加えた)罪人に仕事を命じ、圜土(牢獄)に置き、収容してこれを教戒する。上罪は三年でゆるし、中罪は二年でゆるし、下罪は一年でゆるす」(『周礼』秋官司圜)と言うのは、すべて徒刑のことである。そして今日の律ではさらに五等に分けている。流刑は堯・舜の時代より始まる。『書』に「流刑によって五刑をゆるめる」(『尚書』舜典)、また「五刑をゆるめて流刑に置き、その五つの流刑に処された者を三箇所に置く」(同上)と言う。今日の三つの流刑は、その意義を受けたものである。斬・絞の罪は、刑の極みである。『春秋元命包』に「黄帝、蚩尤を涿鹿の野に斬る」と言い、『礼記』に「公族で死罪を犯した者があれば、甸人(郊野を管理する役人)に縊死させた」(『礼記』文王世子)「樂器の磬(けい)をかけるように縊死させると注記される」と言う。斬は黄帝より、絞は周代にはじまったことがわかる。この二つはいずれも古の大辟の刑である。

調べたところ唐と明の律では、笞・杖の各条に、いずれも贖刑の数目を註記していたが、順治・康熙年間の律には

なかった。雍正三年に律例館が修訂し、始めて贖すべき銀の数目を前図に列記した。また国初の律の笞・杖の回数に附した小註では、十を五に輕減するとしていた。康熙年間の現行則例が、始めて十を四に輕減し、また五未満の端数を切り捨てとした。このため杖一百は四十回の板打ちに止まるのである。雍正三年に律例館が修訂し、改めて「折四」「除零」等の語を註記した。笞刑に附した小註の「笞とは撃つことである。また恥という意味もある」、徒刑に附した小註の「徒とは奴僕である。けだしこれを奴僕として辱しめるものである」、流刑に附した小註の「処刑するに忍びずこれを遠方に流すものである」等の文は、順治年間に『唐律疏議』より採ったものである。乾隆五年に律例館が修訂し、合わせて「小竹板を用いる」、「杖は笞より重い。大竹板を用いる」の字句を補った。

さらに条末の小註について調べたところ、もともとの律には「ただちに処刑する犯罪を除き、それ以外の死罪の罪人は、巡撫と巡按御史が審理して明らかにし供述書を取って題本を提出し、刑部が覆審し、旨を奉じて監禁することが認められたならば、必ず次回の巡按御史の再審の際に、情真・矜疑の二つの項目に分け、上奏して皇上のご裁断を請う」等の語が記されていた。雍正三年の律例館の修訂の際に、「情真」の「真」字を改めて「情実」の字句とした。また順治十八年、すでに巡按御史による審録の例が停止されていたので、当該の巡撫が例に従って行うことを認めた。康熙四年、直隸・各省の秋審について、当該の巡撫が総督と会同して審録させることが、題本によって認められた。このため「巡撫と巡按御史が審理して明らかにし」および「次回の巡按御史の再審の際に」等の文を削除した。また調べたところ、順治十年に始めて朝審の例が挙行され、情真・緩決・矜疑の三つの項目に分けられた。順治十五年、各省の秋審もまた京師の事例に倣って、詳しく審理し三つの項目に分けて奏摺で報告することが、題本によって認められた。このため雍正三年の律例館の修訂では、合わせて緩決の項目を一緒に加えて、前に記した小註のように編纂した。全ての秋審・朝審に関する条例は、ともに断獄門の有司決囚等第条に列記されている。参看すべきである。

二 吳壇『大清律例通考』卷頭所收 吳重憲「律例通考校刊緣起」

標点文 吳重憲「律例通考校刊緣起」

嗚呼。此我高祖中丞公、未竟之業也。我太高祖大司寇恭定公、由雍正七年制科召對稱旨、授刑部京官。純廟龍飛元年丙辰重脩律例、恭定公實官纂脩、手定名例二卷。先後在刑部二十餘年。中丞公日承庭訓、於律例固已習聞。辛巳成進士、復官刑部。甫受事即明決如老吏。總理十八司、歷辦秋審、出入平允。奉命按獄外省凡十餘次、多所平反。秋曹之敘雪堂額猶公手書也。丙戌恭定公以甘藩人爲少司寇、父子堂司、蒙純廟特旨、無庸迴避。次年遂由郎中超擢蘇臬。距通籍僅六年耳。壬辰恭定公調任少宰、公即以蘇藩入補恭定公所遺少司寇缺。時論榮之。而公所以受主知承庭訓者、畢生精力皆萃於律例一書。蓋公生平無嗜好、獨於刑名之學夙所專心、用是輯爲通考一書。溯源三代·漢唐、以迄昭代。每一圖·一律·一例後、各註按語。凡例文之脩改、字句之增刪、莫不竟委窮源、精詳甄覈。脩止於乾隆四十三年、其四十四年之新章、則列爲應纂、以備編入。其已刪之例亦必附書本條之末、申明所以刪之故。凡有酌擬應刪應改及另有議論者、俱用又按以爲別。而服制一類、折衷經義、尤爲精審。本期成書後繕寫進呈、未果而公於庚子秋告薨於蘇撫任所。

迄今已逾百年、幾將散軼、若有呵護。四五世來、抱殘守缺、斤斤恐墜、時冀有專門之學繼纂成書、而虛願難償、名山終闕。徒以未成之著、愼重遷延、未付梨棗。重憲承先人餘蔭、倖秉一麾。每撫遺編、時虞隕越。況其間一經傳託之非人、兩歷梓桑之烽火。儻有失墜、罪孽彌深。不如即以原稿梓刊問世、用質當代君子續爲編輯。於以備一代之典章、定百年之因革、使千古律例之學洞澈淵源、而先人畢生之功亦附以不泯焉。其中應脩應補、正復紛歧、蠹食鈔譌亦未敢臆斷、謹一遵原本、以待高明、如獲成書、感德不朽。光緒丙戌三月、元孫重憲謹述。

訓読文

嗚呼。此れ我が高祖中丞公、未だ竟はらざるの業なり。我が太高祖大司寇恭定公、雍正七年の制科に由り召對せられるに旨に稱ひ、刑部京官を授かる。純廟龍飛の元年丙辰、律例を重脩するに、恭定公實に纂脩に官たり、手づから名例二卷を定む。先後して刑部に在ること二十餘年なり。中丞公日々庭訓を承け、律例に於いては固より已に習聞す。辛巳、進士と成り、復た刑部に官たり。甫めて事を受くるも即ちに明決すること老吏の如し。十八司を總理し、秋審を歷辦し、出入すること平允なり。命を奉じて獄を外省に按ずること凡そ十餘次、平反する所多し。秋曹の敘雪堂の額は猶は公の手書のごとし。丙戌、恭定公甘藩を以て入りて少司寇と爲り、父子堂司なるも、純廟の特旨を蒙り、廻避を庸る無し。次年、遂に郎中由り蘇臬に超擢せらる。通籍より距たること僅かに六年なるのみ。壬辰、恭定公少宰に調任せられるや、公即ち蘇藩を以て入りて恭定公遺す所の少司寇の缺に補せらる。時論之を榮えとす。而して公の主知を受け庭訓を承くる所以は、畢生の精力皆な律例一書に萃めればなり。蓋し公は生平嗜好無く、獨り刑名の學に於いて夙に専心する所にして、是を以て輯めて通考一書を爲る。源を三代・漢唐に溯り、以て昭代に迄る。一圖・一律・一例毎の後、各々按語を註す。凡そ例文の脩改、字句の増刪は、委を竟め源を窮めて、精詳に甄覈せざる莫し。脩むること乾隆四十三年に止み、其れ四十四年の新章は、則ち列ねて應に纂すべしと爲し、以て編入に備ふ。其れ已に刪るの例も亦た必ず本條の末に附書し、刪る所以の故を申明す。凡そ酌擬して應に刪るべき、應に改むるべき、及び別に議論有る者有らば、俱に「又按ずるに」を用ゐて以て別と爲す。而して服制一類は、經義を折衷すること、尤も精審なり。本より成書の後、繕寫して進呈せんと期するも、未だ果たさずして公、庚子の秋に薨を蘇撫任所に告ぐ。

今に迄るまで已に百年を逾多、幾ど散軼せんとするも、呵護有るが若し。四五世來、抱殘守缺し、斤斤墜ふを恐る。時に専門の學有りて、繼纂して成書せんと冀ふも、虛願にして償ひ難く、名山終に闕ざされん。徒に未成の著なるを

以て、慎重に遷延し、未だ黎^り藁^{そう}に付さず。重憲、先人の餘蔭を承け、倖^{さい}ひに一麾^いを秉^とる。遺編を撫する毎、時に限越を虞^{おそ}る。況んや其の間、一たび傳託の非人を経、兩^{ふた}たび梓桑の烽火を歷^ふる。儻^もし失墜すること有らば、罪孽^{ざいげつ}彌^い深^{ふか}からん。即ち原稿を以て梓刊して世に問ひ、用て當代の君子に質^{ただ}し、續けて編輯を爲すに如かず。以て一代の典章を備へ、百年の因革を定め、千古の律例の學をして淵源を洞澈せしむれば、先人の畢生の功も亦た附するに不泯^{ふびん}を以てす。其の中の應に脩むべき應に補うべき、正復の紛歧、蠹^と食^し鈔^{しょう}譌^ごも亦た未だ敢へて臆斷せず、謹みて一いち原本に遵^ふふ。以て高明を待ち、如し成書を獲れば、感徳不朽なり。光緒丙戌三月、元孫重憲、謹みて述ぶ。

演習に臨んで

光緒十二年（一八八六）本『大清律例通考』では、序にあたる文章として、巻頭に吳壇の玄孫吳重憲による「律例通考校刊緣起」（以下「緣起」）が置かれる。吳重憲もまた清朝の官僚経験者で、「緣起」を記した光緒十二年当時は河南陳州府知府（¹⁴）、その後、清朝最末期には江西巡撫・郵電部右侍郎・同左侍郎・河南巡撫などを歴任した（¹⁵）。この「緣起」には、前半に吳壇とその父吳紹詩の経歴と、吳壇による『大清律例通考』の著述について述べられ、後半には吳壇の死後、その子孫が原稿を受け継ぎ、吳重憲の代にいたって出版することになった経緯や意図が語られる。ここでは便宜上、前半と後半で段落を分けた。

なお、デジタル史料の検索も容易になった昨今、書物の部分のみを取り出して用いる手法が採られがちだが、利用しようとしている書物の構造や性格の把握もないがしろにすることはできない。とくに書物の序や跋などでは、編著者やその関係者、執筆を依頼された者などが、書物の来歴や特徴、あるいは出版の意義などを記するのが一般的である。後述するように、このような文章には執筆者の立場や認識による制約がかかりがちだが、それを意識しつつもある書物を史料として取り扱う際には、序や跋の類にも目を通しておくといふ。

また、序・跋など、和漢の書籍に関わる語句について確認する際には、長澤規矩也編著『図書学辞典』（長澤規矩也先生喜寿記念会、一九七九年）が便利である。線装本の書物などを利用する際には、漢籍を対象とした書誌学の手引き書も一読しておくとういだろう。

〈高祖中丞公〉は吳壇、〈太高祖大司寇恭定公〉はその父吳紹詩を指す（恭定は吳紹詩の諡）。清代には、中丞は巡撫、大司寇は刑部尚書の雅名として用いられており、吳壇が江蘇巡撫、吳紹詩が刑部尚書となったことにちなんでいる。また、史料中に見える〈少司寇〉は刑部侍郎、〈甘藩〉〈蘇藩〉はそれぞれ甘肅布政使・江蘇布政使、〈蘇臬〉は江蘇按察使、〈少宰〉は吏部侍郎を指す。少司寇・少宰など六部侍郎の雅名は左・右の別なく用いられるので、『清史稿』の職官表や錢実甫『清代職官年表』（中華書局、一九八〇年）などで確認するとよい。本節の現代語訳では左・右を確認の上、これを補った。

〈制科〉は皇帝の命によって臨時に挙行される科目別試験で、清代には博学鴻詞科・孝廉方正科などが時に行われた。ここでは吳紹詩が雍正七年（一七二九）の制科で皇帝の御意にかなひ、刑部官僚となったと記されているが、より正確には、彼は湖北黄梅知県をしていた伯父吳象寛の保挙を通じて雍正七年九月に皇帝の引見を受け、官途に就いた。保挙は皇帝の上諭を受けて官僚が人材を推挙する制度であり、これを経て官僚に採用されることを薦擢と言う。『清史稿』巻百九・選舉四は制科と薦擢について述べているが、吳紹詩に該当する雍正七年の事例は制科ではなく薦擢の項に記される。

このときの保挙は、雍正六年（一七二八）十月の上諭によって呼びかけられたもので、これによって推挙された候補者三十六名は吏部の考試を受け、うち二十五名分の試卷が雍正七年九月に皇帝に届けられた。雍正六年十月の上諭は中国第一歴史檔案館編『雍正朝漢文諭旨匯編』七・上諭内閣（広西師範大学出版社、一九九九年）、雍正七年九月の引見時の吏部の上奏および吳紹詩を含む候補者の試卷は秦国経主編『中国第一歴史檔案館藏清代官員履歷檔案全編』十一

（華東師範大学出版社、一九九七年）四七七～四九二頁に収録されている。また、呉紹詩には『蟻園自記年譜』という自撰年譜もあり⁽¹⁶⁾、こちらにも雍正六年の呉象寛による推挙と雍正七年の引見を経て官職を授かったことが明記されている。

一方、『滿漢名臣伝』漢名臣伝卷三十一、『国朝耆献類徴初編』卷八十、『清史稿』卷三百二十一の呉紹詩伝は、いずれも雍正二年（一二二四）に彼が保举されたと記すが、これは伝記史料が依拠した清朝の国史館収蔵の伝稿が「七」を「二」に誤って記載していたためと推測される。この三冊のうち、乾隆末・嘉慶初の出版とされる『滿漢名臣伝』は国史館の伝稿を編輯・出版した早期の史料であり、清末の光緒十六年（一八九〇）出版『国朝耆献類徴初編』の呉紹詩伝も典拠を国史館本伝と明記している。民国期に編纂・出版された『清史稿』は多様な史料に基づいており、個々の伝記の典拠も一々明記しないが、呉紹詩伝については『滿漢名臣伝』、『国朝耆献類徴初編』と大きな異同はなく、やはり国史館の伝稿がこれに由来する書物に依拠したとみられる⁽¹⁷⁾。いずれにせよ呉紹詩が官途に就いたのは、伝記史料が語る雍正二年ではなく、「縁起」に記され、上記の檔案類や年譜によって裏付けられる雍正七年と断じてよい。

ここでは呉重憲「縁起」の記事と伝記史料の記述の齟齬を、公的な記録（檔案史料）や当事者の言説（自撰年譜）と照らし合わせて正誤を判断したが、多様な情報が残る清代史では、各種の史料を相互に突き合わせることで、より精度の高い史実にたどり着くことができる。一方で特定の史料に依拠し、それを鵜呑みにしてしまうと、思わぬ事実誤認に陥る場合がある。その事柄に関してどのような種類の史料がありうるか、また編纂史料の場合、その素材は何であるかなど、常に意識しながら史料に接していくことが求められる。

ちなみに、雍正七年（一二二九）に呉紹詩がしたための試卷によると、彼は山東海豊の人で雍正三年（一二二五）から湖北で知県をしていた伯父呉象寛のもとに身を寄せ、刑名錢穀のことを学んだという。また、呉紹詩の祖父にあたる呉自肅も官僚で、当時は山西河東道をしていた（『中国第一歴史檔案館蔵清代官員履歴檔案全編』十一、四八九頁）。この

ように吳壇の家系は代々官僚を輩出する名門一族であった(18)。

〈純廟龍飛〉純廟は乾隆帝のこと。純廟龍飛で乾隆帝の即位を指す。

〈辛巳成進士〉辛巳の歳、すなわち乾隆二十六年(一七六一)に吳壇は第二甲の二十三番目の席次で進士出身となった。進士には第一甲の進士及第のほか、第二甲の進士出身、第三甲の同進士出身の格付けがあるが、これは朱保炯・謝沛霖編『明清進士題名碑錄索引』(上海古籍出版社、一九七九年)にて確認することができる。また同書によつて、吳壇の曾祖吳自肅は康熙三年(一六六四)の進士出身、大伯父吳象寛は雍正元年(一七二三)の同進士出身であることもわかる。

なお、この辛巳など、「縁起」ではしばしば年を干支で表しているが、干支と年号・西暦の照合には、『アジア歴史事典』第九卷(平凡社、一九六二年初版)付録の「アジア紀年表」や、『東方年表』(平樂寺書店、一九五五年初版)が便利である。また、この「縁起」には日付に関わる記述はないが、実録等、日付を干支で表示した史料もある。そのような史料を読む際には、古典的な工具書として陳垣『二十史朔閏表』(勵耘書屋、一九二五年例言。藝文印書館、一九五八年増補版)がある。さらに正徳十一年(一五一六)以降に限られるが、中国と西洋の暦を日にち単位で照合できる鄭鶴声編輯『近世中西史日対照表』(国立編訳館、一九三六年初版)も便利な工具書である。

〈總理十八司〉〈秋曹〉刑部には、各地方の刑案処理などの事務を分担する直隸・奉天・江蘇・安徽・江西・福建・浙江・湖広・河南・山東・山西・陝西・四川・広東・広西・雲南・貴州の十七清吏司に督捕清吏司を加えた十八清吏司が置かれ、これを十八司と総称した。また、刑部では主事・員外郎・郎中といった司官と総称される事務官が、この十八清吏司およびその他の若干の部局に配属された。各清吏司には主稿という部局長的な立場の者が置かれたが、吳壇は「十八清吏司をまとめ上げ(總理十八司)」たというから、この主稿たちのとりまとめ役となつたのであろう。また、秋曹は刑部の別名である。

〈廻避〉官僚を任用する際、親族どうしが同じ部署に所属することを避けたり、当人の本籍への配属を避けたりすることを廻避と呼ぶ（『臨時台湾旧慣調査会第一部報告 清国行政法』一下〔臨時台湾旧慣調査会、一九一四年〕二六二～二七〇頁）。乾隆三十一年（一七六六）当時、呉壇は刑部郎中であつたが、父呉紹詩が刑部右侍郎に任命された。本来であればこの廻避の制によつて、呉壇は刑部以外の部署に異動する必要があつたが、乾隆帝は呉壇の実務が明敏であることを理由として、親子で刑部に奉職することを例外的に認めた（19）。

〈由郎中超擢蘇臬〉六部の郎中（正五品）が昇進して地方官に転出する際、通常は知府（從四品）か道員（正四品）に任命される。按察使（正三品）への任命は特進と言つてよく、「超擢」とはこれを指している。乾隆帝が呉壇に大きな期待をかけていたことが窺われる。

〈竟委窮源〉「竟」はきわめる、「委」はすえの意で、「竟委窮源」で事の本末を究明するの意となる。「窮源竟委」に同じ。

〈名山〉『史記』太史公自序に「六経の異伝をあわせ、百家の雜語を整え、これを名山に收藏し、副本を京師に置いた（厥協六經異傳、整齊百家雜語、藏之名山、副在京師）」とあり、後世、名著のことを「名山」と例えるようになった。

〈梨棗〉〈梓刊〉梨（梨）も棗も書物の版本として用いられたことから「梨棗に付す」で出版するの意となる。梓も版本として用いられたので、「梓刊」も出版を指す。

〈一麾〉麾はさしずばた。ここでは「一麾を秉る」を、出版の指揮を取るの意に解した。

〈兩歷梓桑之烽火〉梓桑は郷里を指す語。ここでは呉家の原籍、山東省武定府海豊県を指す。民国『無棣県志』卷十六祥異志・事紀には、「（同治六年）冬十一月、流賊が県の領域に侵入してきた。七年夏四月、捻匪（捻軍）が県城に侵入し、県内全域を蹂躪した。秋になつて官軍が討伐・捕縛して沈静化した（冬十一月流賊入境。七年夏四月捻匪入城、蹂躪偏境。至秋官軍勦捕清肅）」との記事が見え、同治六年（一八六七）と七年（一八六八）に海豊県が戦火に見舞われたこ

とが知られる（海豊県は一九一四年に無棣県と改名された）。二度の烽火というのは、おそらくこの二カ年の戦災を指すのであろう。なお、同治七年の捻軍侵入の際には、吳重熹も郷里の防衛に尽力しており、朝廷から顕彰されている（『中国第一歴史檔案館藏清代官員履歷檔案全編』七、三三九頁）。

〈正復紛歧〉 正本と復本（復本、副本）の記述の食い違いを言うのであろう。つまり吳家には『大清律例通考』が少なくとも正副二組伝えられていたことになる。

〈元孫〉 本来は玄孫。康熙帝の諱（玄燁）を避け、元孫と表記された。避諱については前節の「情眞」の項も参照。

この史料が語るもの、語らないもの

「縁起」が述べるように、吳紹詩は雍正・乾隆年間にかけて、吳壇は乾隆年間において、清朝の法実務に深く関わった父子であった。吳紹詩は乾隆律の編纂も担当した明法家であり、吳壇はその父から律例の手ほどきを受けた。刑部の実務における父子の知識や経験は乾隆帝もよく認めており、乾隆三十一年（一七六六）に両者が同時に刑部に任官することを特例的に認めたのはそのあらわれである。そして乾隆三十七年（一七七二）には、刑部右侍郎であった父が吏部右侍郎に転じ、その後任に子の吳壇が任命された。父子での六部堂官職の継承は、「縁起」が「時論はこれを光栄なことにした（時論榮之）」と特記するように異例のことであり、『清史稿』の吳紹詩伝にも「父子での交代は、はなはだ異例である（父子相代、尤異數）」と記されている。

さて、乾隆二十六年（一七六一）に進士となった吳壇は、その後刑部の司官として実績を積み、江蘇按察使・江蘇布政使を経て、上記の通り乾隆三十七年（一七七二）に刑部右侍郎となった。地方高官を経て中央に呼び戻されるという理想的な出世の階梯を昇っており、まさに順風満帆な官僚人生を送っていたと言ってよいだろう。そして「縁起」はここからすぐに『大清律例通考』の著述に話題を移し、乾隆四十五年（一七八〇）、江蘇巡撫在任中に彼が没したこと

を伝えている。ここでは刑部右侍郎就任から約八年間の経歴に全く言及がないことになるが、「縁起」は意図的にこれを伏せているものと思われる。熟達の刑部官僚としてならした呉壇は、乾隆三十九年（一七七四）に革職（免職）の上、その刑部の獄に収容される罪人となったのである。律例の専門家として時論にも称えられた呉壇が、律例によって裁かれる立場になったという不名誉に、彼の子孫が著した「縁起」が触れていないのはやむを得ないところであろう。ただ、呉壇が『大清律例通考』を著述し、完成後には皇帝に進呈しようと心に決めていたという、その背景にある心情を汲むには、この出来事を避けて通ることができない。そこで以下、前引の「縁起」があえて語らない乾隆三十九年の出来事について確認しておきたい。

呉壇の伝記は、前記の『滿漢名臣伝』、『国朝耆献類徴初編』、『清史稿』の呉紹詩伝に付される形で収録されている。三つの伝記は内容的に大きな異同はないが、『清史稿』は記述がやや簡略になっている。このうち最も早期に成立した『滿漢名臣伝』は、この事件について次のように記している。

三十九年、内監高雲従から記録を探ったために革職され、刑部に引き渡して取り調べ罪を定めることになった。詳しくは観保伝を見よ。上諭には「呉壇の記録を探った一件については、ついにここに至るとは実に思いもよらぬことだった。ただその刑名を処理することに習熟していることを考慮すると、官を罷めさせたり死刑に処したりするのは惜しいだろう。恩を施して刑部主事として用いることにする」と語られている。

（三十九年、以向内監高雲従探聽紀載革職、交刑部查審擬罪。詳見觀保傳。諭曰「呉壇于探聽紀載一事、寔不意其竟至于此。但念其辦理刑名尙爲練習、若竟于（20）廢棄未免可惜。著加恩以刑部主事用」。）

すなわち高雲従という宦官から何らかの記録を探ったため、革職の上、罪を問われることになったのである。

もとより官僚が宦官と気脈を通じることは、不正の温床となるため禁じられており、『大清律例』にはこれに関する律（吏律・職制・交結近侍官員律）も定められている。この高雲從の事件については次節にてより詳しく述べることとして、この記事に記されるように吳壇は一命を許されたものの、刑部右侍郎（正二品）から刑部主事（正六品）へと、大幅な貶官処分を受けたのである。

こうして刑部主事に降格された吳壇であるが、その後、彼は乾隆四十年（一七七五）に刑部郎中となり、同年末より四十三年初めまで母の喪に服し、乾隆四十四年（一七七九）に江南河庫道、ついで江蘇布政使、乾隆四十五年（一七八〇）に江蘇巡撫と、速いペースで地位を戻していくことになった。しかし宦官との内通という不名誉な罪に問われ、官歴に大きな傷を負ったことは、事実として残ることになった。乾隆三十九年（一七七四）以降の吳壇は、刑名に習熟しているという、皇帝が認めた才智でもって自らの価値を示し、再起をはかる立場に置かれたのである。そして、前引の「縁起」に記されていたように、『大清律例通考』は、まず乾隆四十三年（一七七八）までにまとめられ、その翌年の新しい規定を追記するものとなっている。あるいは早くから構想を温め、材料の収集などには着手していた可能性もあるが、その編述が大きく進んだのは乾隆四十三年に比較的近い時期ということになる。ちょうどそこには服喪のため帰郷していた期間も含まれ、執筆に専念する時間と環境もあった。大きな挫折を経験し、刑名の才をもって再起の糸口を与えられた吳壇は、彼が畢生の精力を注ぎ込んだという律例に関する著作をまとめあげ、これを皇帝の御覽に供することで、その挫折を乗り越える証としようとしたのではなからうか。『大清律例通考』には、律例に精魂を傾けた官僚の痛切な思いが込められているように思われる。

以上、吳重憲の「縁起」と、そこには語られない吳壇の経歴について見てきた。ひとつの史料に接するとき、その史料を記した者の立場、意図を理解することが求められる。「縁起」は吳壇の子孫によって書かれた文章であり、そこから来る制約には十分に注意を払う必要がある。高雲從案に言及しないことはそのわかりやすい一例と言えるであら

う。しかし清代には、一個の史料が他と孤立隔絶していることは少なく、かかる文章もその他の史料と照らし合わせたり、つなぎ合わせたりすることで、新たな発見が得られるのである。微細な言葉の齟齬や、記載の欠落は、研究の手がかりにもなりうるものであり、そうした手がかかりを見逃さない観察眼を養っておきたい。また、本節では呉壇の父呉紹詩の官途について、史料間に年次の齟齬があることを指摘し、檔案史料や年譜と照合することで、その正誤を検討した。細かな作業ではあるが、史料の記述を一つ一つ確認していく作業の一例として見てもらいたい。

現代語訳

ああ。これは我が高祖中丞公（呉壇）、未完の事業である。我が太高祖大司寇恭定公（呉紹詩）は、雍正七年の制科によって皇帝に召されてご下問に答えたところ御意にかなひ、刑部の官職を授かった。乾隆帝がご即位になり、乾隆元年、律例を重修した際、恭定公は纂修官となり、みずから名例律二巻を修訂した。刑部にいること前後二十余年であった。中丞公は日々家庭で教育を受け、律例についてはもともと聞き慣れていた。乾隆二十六年、進士となり、また刑部に任官した。はじめて事件を担当したのに、たちどころに明快に解決することは熟練の官吏のようであった。十八清吏司をまとめ上げ、秋審を歴年処理し、罪の輕重を判断すること当を得ていた。皇上のご下命によって外省で裁判を担当すること十数回におよび、冤罪を晴らすことが多かった。刑部の叙雪堂の額は公の書かれたもののものである。乾隆三十一年、恭定公が甘肅布政使から刑部右侍郎となり、父子で堂官と司官となったが、乾隆帝の特旨をいただき、廻避の制は適用されなかった。次の年には、ついに刑部郎中より江蘇按察使に異例の拔擢をされた。仕官してからわずかに六年しかたっていないかった。乾隆三十七年、恭定公が吏部右侍郎に異動すると、公は江蘇布政使から恭定公の後任となる刑部右侍郎の席を授けられた。時論はこれを光榮なこととした。そして公が皇上の知遇を得、家庭で教育を受けることができたのは、畢生の精力をすべて律例に注いだからである。けだし公は日ごろより嗜好はなく、

ただ刑名の学についてのみ早くから専念しており、これによって『大清律例通考』をまとめ上げた。淵源を夏殷周の三代や漢唐に遡り、当代に至っている。ひとつの図・ひとつの律・ひとつの例ごとに後に按語を註記している。例文の修改、字句の増削については、事の本末を究明して、詳細に觀察・調査している。編修は乾隆四十三年までで区切りとし、乾隆四十四年の新しい規定は、列記してまさに纂すべしとして、編入に備えている。すでに削除した例も必ず該当する条の末尾に付記し、削除した理由を明記する。斟酌してまさに削除すべき、まさに修改すべき、および別に議論があるものについては、すべて「また按ずるに」を用いて区別する。そして服制の類については、経書の意義を折衷して、とりわけ詳しく明らかにしている。もともと書物が完成した後、清書して進呈しようと心に決めていたが、いまだ果たせずに公は乾隆四十五年の秋、江蘇巡撫の任所にて亡くなった。

今日までにすでに百年がたち、ほとんど散軼しそうになったが、加護があつたようである。四、五世代にわたって、残された書物を大事に守り、わずかでも失うことを恐れてきた。時に専門の学者が、継続して編纂し完成させようと願ひ出てきたが、誠意のない願ひであつたので応じることができず、名著はついに秘蔵されてきた。いたずらに未完の著作であることによって、慎重に引き延ばし、いまだに出版されていない。重意は先人の余慶を被り、幸いに（出版の）指揮を取ることとなった。遺された書物を撫でるたびに、時に失われることを危惧する。ましてやこれまでの間に、一度、伝託に人を得なかつたことがあり、二度、郷里に戦火が及ぶことがあつた。もし失われていれば、その罪は一層深いものになっただろう。すなわち原稿を出版して世に問ひ、当代の君子に質し、続けて編輯してもらひに越したことはない。それによつて一代の典章を整え、百年の沿革を定め、千古の律例の学問についてその淵源を透徹すれば、先人の畢生の功績もまた不滅のものとなるのである。原稿の修正すべきところや補うべきところ、正本と復本の食い違い、虫食いや誤記についてもあえて臆断せず、謹んで逐一原本に遵つた。そして高明な見識を待つて、も

し書物を完成させることができれば、その徳に永く感謝したい。光緒十二年三月、玄孫重憲、謹んで述べる。

三 「太監高雲從洩漏記載」関連史料

——中国第一歴史檔案館編『乾隆朝上諭檔』（檔案出版社、一九九一年）より——

①『乾隆朝上諭檔』第七冊（No. 1814「太監高雲從結交外廷大臣官員洩漏記載並將伊弟囑託外任官員充當長隨一案」）。 標点文

臣福隆安・臣努三・臣札拉豐阿・臣崔應階謹

奏。爲審擬具

奏事。竊太監高雲從結交外廷大臣・官員洩漏記載竝將伊弟囑託外任官員充當長隨一案、經臣福隆安・努三・札拉豐阿、遵

旨疊次嚴行審訊錄供呈

覽外、今奉

旨著御前大臣會同行在刑部、定擬具奏。欽此。臣等看得。太監高雲從膽敢與外廷大臣・官員認識、得受銀兩洩漏記載。竝敢將伊兄弟私荐外任、充當長隨。招搖滋事、肆行無忌、不法已極。查律載近侍官員洩漏機密重事於人者斬等語。今高雲從以下賤太監種々不法、尤屬可惡應惡。請

旨將高雲從卽行正法、以昭炯戒。爲此謹

奏請

旨。

乾隆三十九年七月二十九日、奉

旨。高雲從著卽處斬。欽此。

訓読文

臣福隆安・臣努三・臣札拉豐阿・臣崔應階、謹みて奏すらく。審擬して具奏する爲の事。竊かにおもふに太監高雲從、外廷大臣・官員と結交して記載を洩漏し、竝びに伊の弟を將て外任官員に囑託して長隨に充當せし一案、經に臣福隆安・努三・札拉豐阿、旨に違ひ疊次厳しく審訊を行ひ録供して呈覽する外、今、旨を奉ずるに御前大臣をして行在刑部と會同し、定擬具奏せしむと。此れを欽めり。臣等、看し得たり。太監高雲從、膽敢に外廷大臣・官員と認識し、銀兩を得受して記載を洩漏す。竝びに敢へて伊の兄弟を將て私に外任に荐め、長隨に充當す。招搖して事を滋くし、肆まに無忌を行ひ、不法已に極まれり。律を査するに「近侍官員の機密重事を人に洩漏するは斬」等の語を載す。今、高雲從、下賤の太監を以て種々の不法、尤だ惡むべき應に惡むべきに屬す。旨を請ひ高雲從を將て卽行正法し、以て炯戒を昭らかにされんことを。此れが爲に謹みて奏して旨を請ふ。

乾隆三十九年七月二十九日、旨を奉ず。高雲從は卽ちに斬に處しむと。此れを欽めり。

演習に臨んで

この史料は宦官高雲從に対する死刑判決文書である。

標点文は原史料の擡頭を反映して書き出した。この史料では、皇帝の指示〈旨〉と行為〈覽〉が二文字高く表記され、また臣下の皇帝に対する言上〈奏〉が一文字高く表記されている⁽²⁾。また訓読文と逐語訳では、内容によって文書を二つの段落に分けた。第一段落は福隆安ら四名の官僚による奏摺で、第二段落がこれに対する皇帝の旨と旨を

受けた年月日の記録である。

第一段落の奏摺の差出人の筆頭に名のがる〈福隆安〉は、満洲鑲黃旗の人で乾隆帝の外戚（皇后の兄弟の子）であった。乾隆帝の娘（和嘉公主）を妻とする駙馬でもあり（皇帝の娘を公主、娘婿を駙馬という）、当時は工部尚書と歩軍統領を兼ね、軍機大臣の一人として名を連ねていた。また乾隆三十五年（一七七〇）には総管内務府大臣にも任じられており、宮中や宦官に関わる重臣として本件の審理に当たったものと思われる⁽²²⁾。〈努三〉は満洲正黃旗の人、当時は正藍旗満洲都統という高位武官で乾隆三十三年（一七六八）には御前大臣を授かっている⁽²³⁾。〈扎拉豐阿〉は喀喇沁部の多羅郡王で、事件前年の乾隆三十八年（一七七三）に御前大臣を授かっている⁽²⁴⁾。御前大臣は皇帝を守護する御前侍衛の統率者で⁽²⁵⁾、皇帝からの信の厚い側近が任命された。また、〈崔應階〉は湖北江夏の人で、当時の刑部尚書である⁽²⁶⁾。史料中に〈行在刑部〉とあるが、「行在」は京師を離れた皇帝の御在所を指す。乾隆三十九年（一七七四）七月当時、乾隆帝は恒例の避暑のために北京を離れて熱河の承德に滞在しており、扈從していた崔應階以下の刑部官僚が行在刑部を構成し、福隆安らと会同して事件審理にあたったのである。刑部官僚だけではなく側近の大官を複数動かしているところに、乾隆帝が本件を相当重大視していた様子を見て取ることができる。

さて、この檔案を見ていくと、第二段落の乾隆帝の旨が下されるまでに乾隆帝と官僚たちの間で次のようなやりとりがあったことが読み取れる。

①、乾隆帝が福隆安・努三・扎拉豐阿に旨を下した（この文書では詳細不明だが、②から高雲従の審理を命ずる内容であったと推察できる⁽²⁷⁾）。

②、福隆安・努三・扎拉豐阿が、①を受けて高雲従を繰り返し厳しく審理・訊問し、供述を録って皇帝の御覧に供した（經臣福隆安・努三・扎拉豐阿、遵旨疊次嚴行審訊、錄供呈覽外）。

③ 乾隆帝が、御前大臣に行在刑部と会同し、判決案を定めて上奏せよとの旨を下した（今奉旨著御前大臣會同行在刑部、定擬具奏。欽此）。

④ ③を受けて福隆安・努三・扎拉豐阿と刑部尚書崔應階が作成した上奏が、この文書の第一段落である。上奏の前半では、事件の表題やそこまでの経緯（①～③）が記され、「臣等看得」以下に具体的な判決案が記される。福隆安らは「近侍官員洩漏機密重事於人者斬」との律を引き、高雲從をただちに処刑するよう乾隆帝に請願した。

⑤ そして③の判決案に対する乾隆帝の返答が、第二段落に記される「高雲從著即處斬」である。高雲從をただちに斬に処すよう命じており、福隆安らの判決案が容れられたことがわかる。

本件は比較的短い文書であるが、それでもこれだけの手続きを踏んでいることが文書内から読み取れるのである。皇帝周辺に限らず、このような檔案史料を扱う際には、その文書の作成・発出者や文書の形態、宛先などの情報を把握し、さらに右の①～③のように先行するやりとりが含まれる場合にはそれも整理しながら、当該文書に至るプロセスを復元する必要がある。本件のやりとりは皇帝と大臣らの間で進んだが、地方から順次積み上げられていく事案など、何層にもわたる複雑な構造をとる文書となることもある。そのような場合も文書の構造を意識しながら、手続きの過程を可能な限り復元していくことが、その史料を読み解く上での必須の作業となる。

そして、清代の檔案には常套句として用いられる特定の字句があり、これらを押さえておくこと文書の構造を把握する際の有力な手がかりとなる²⁷⁾。この史料の場合は、臣下が皇帝に上奏を差し出す〈謹奏〉〈具奏〉、皇帝の指示を受けたことを指す〈遵旨〉〈奉旨〉、上奏などを皇帝の御覧に呈したことを示す〈呈覽〉など、文書のやりとりを示す字句にまず注目する必要がある。また、皇帝の上諭や旨を記した後に置かれる〈欽此〉、引用文の末尾に置かれる〈等語〉などにも注意したい。このほか、官僚の見解の書き起こしを示す〈竊〉〈看得〉なども重要な字句である。

なお、この文書は福隆安らの奏摺（第一段落）とそれに対する皇帝の旨やそれを受けた日付（第二段落）が同じ筆跡で記されていることから、奏摺の原本ではなく、奏摺と旨を合わせて軍機処で清書し、上諭檔に加えられた記録であることがわかる。この文書を収録する『乾隆朝上諭檔』は、皇帝の発する文書のうち特に上諭を集中的に収めているが、本件のような上諭以外の記録も少なからず含んでいる。

ところで高雲従の罪状として上げられる〈洩漏記載〉であるが、彼はどのような記録を外廷の大臣や官員に洩洩したとされたのであろうか。この史料にはそれ以上の情報は記されないが、この一件について乾隆帝が最初に下した乾隆三十九年七月二十三日の上諭には「記名人員硃批記載」⁽²⁸⁾とあり、皇帝の硃批であったことがわかる。「記名」は軍機処の人事記録の一種であり、これに関わる硃批となれば人事に関わる皇帝の指示やコメントということになる。そして、右の史料では高雲従に対して「近侍官員、機密重事を人に洩漏するは斬（近侍官員洩漏機密重事於人者斬）」との律が適用されているが、これは『大清律例』の漏泄軍情大事律である⁽²⁹⁾。この律には「もし近侍官員が、機密重事〔軍事情報のみを指すのではなく、およそ國家の機密で重要なことはすべてこれに該当する〕を人に漏洩すれば、斬〔監候〕とする（若近侍官員、漏泄機密重事〔不專指軍情、凡國家之機密重要皆是〕於人者、斬〔監候〕）」との規定が含まれている。高雲従の洩洩した記録は「國家之機密重要」にあたると見なされ、この律が適用されたのである。そして、この罪に対する刑罰は、判決後も直ちには執行されない斬監候であったが、福隆安らは高雲従を即刻処刑すべしとより重い処罰にすることを提案し、乾隆帝もこれを容れてただちに斬に処すよう命じた。奏摺の〈即行正法〉と旨の〈著即處斬〉は、このように即時執行される死刑の際に記される定型句であり、第一節で見た五刑律の死刑の条にあった「時を待たずに処刑する（應決不待時）」に対応した文句である⁽³⁰⁾。

現代語訳

臣福隆安・臣努三・臣札拉豐阿・臣崔應階が、謹んで奏上いたします。審議し判決案を定めて上奏する事。愚考いたしますに、太監高雲從が外廷の大臣や官員と結託して記録を漏洩し、なおかつ自分の弟を地方官に囑託して長随（家丁）にあてがった一件については、すでに臣福隆安・努三・札拉豐阿は旨に遵って繰り返し厳しく審理・訊問し、自供を取って御覽に供しましたが、今、御前大臣に行在刑部と會議して判決案を定めて上奏せよとの旨を賜りました。臣等の見解は次の通りでございます。太監高雲從は大胆にも外廷の大臣や官員と知り合いになり、銀兩を受け取って記録を漏洩いたしました。なおかつ自分の兄弟をひそかに地方官に推薦し、長随にあてがいました。うろつき回って事件を起こし、ほしいままに行動して憚るところなく、不法の極致でございます。調べたところ律には「近侍官員の機密重事を人に洩漏するは斬」と記されております。今、高雲從は下賤な太監の身で様々な不法をはたらいたのであり、はなはだ憎悪すべき者でございます。旨を下して高雲從を即刻処刑し、それによって明らかな戒めをお示しになることをお願いいたします。このために謹んで奏上して旨をお願いいたします。

乾隆三十九年七月二十九日、高雲從は即ちに斬に処せとの旨を賜りました。

②『乾隆朝上諭檔』第七冊（No.1880 乾隆三十九年九月二日上諭。同No.1889 乾隆三十九年九月七日上諭） 標点文

乾隆三十九年九月初二日。内閣奉

上諭。觀保・蔣賜榮・吳壇、身爲大臣、不知安分奉職。觀保輒敢私議道府優劣。蔣賜榮・吳壇甚有向太監高雲從探聽記載之事。其罪均無可逭。幸當朕勵精圖治朝政肅清之時、伊等尙不敢任意妄爲、否則不知何所底止。是以不得不嚴

爲審究、以飭綱紀。今據舒赫德等將觀保・蔣賜榮・吳壇復行提出、反覆研詰、雖供辭俱無指實、而愧悚已如見肺肝。本爲法所不貸、但念其尙無交通結納、行賄營私大弊、觀保・蔣賜榮・吳壇俱著加恩釋放。觀保著以無頂帶人、仍在阿哥書房行走、效力贖罪。欽此。

乾隆三十九年九月初七日。內閣奉

上諭。吳壇於探聽記載一事、實不意其竟至於此。但念其辦理刑名尙爲練習、若竟予廢棄未免可惜。吳壇著加恩以刑部主事用。仍帶革職留任、八年無過、方准開復。欽此。

訓讀文

乾隆三十九年九月初二日。內閣上諭を奉ず。觀保・蔣賜榮・吳壇、身は大臣爲るも、分に安んじて奉職するを知らず。觀保は輒りに敢へて道府の優劣を私議す。蔣賜榮・吳壇は甚しきは太監高雲從に向かひ記載を探聽するの事有り。其の罪均しく追るる可き無し。幸ひに朕、精を勵まして治を圖り、朝政肅清するの時に當たり、伊等尙ほ敢へては意に任せて妄爲せず、否んば則ち何所に底止するやを知らず。是を以て嚴しく審究を爲し、以て綱紀を飭めざるを得ず。今、舒赫德等の觀保・蔣賜榮・吳壇を將て、復ねて提出を行ひ、反覆研詰するに據るに、供辭は俱に實を指す無しと雖も、愧悚して已に肺肝を見ずが如しと。本より法の貸さざる所なるも、但だ其れ尙ほ交通結納、行賄營私の大弊無きを念ひ、觀保・蔣賜榮・吳壇は俱に恩を加へて釋放せしむ。觀保は頂帶無き人なるを以て、仍ほ阿哥書房に在つて行走とし、效力贖罪せしむと。此れを欽めり。

乾隆三十九年九月初七日。內閣上諭を奉ず。吳壇の記載を探聽する一事に於いては、實に意はず其れ竟に此に至ら

ん。但だ其の刑名を辦理すること尙ほ練習爲るを念ひ、竟に廢棄を予ふるは未だ惜しむ可きを免れざるが若し。吳壇、恩を加へ刑部主事を以て用ゐしむ。仍ほ革職留任を帶び、八年過ち無くんば、方めて開復を准すと。此れを欽めり。

演習に臨んで

この二件の史料は、高雲從の事件に関わつたとされる官僚たちへの処分等について記した文書である。一件目の上諭は觀保・蔣賜榮・吳壇の三名について述べており、二件目の上諭はとくに吳壇について述べている。觀保・蔣賜榮・吳壇は乾隆三十九年（一七七四）七月に乾隆帝の上諭によつて革職され、刑部に身柄を拘束されていた⁽³¹⁾。こちらでは行在刑部という表現は使われていないことから、彼らは北京の刑部監獄に収監されたことになる⁽³²⁾。革職前の彼らの官職は、觀保が都察院左都御史、蔣賜榮が戸部右侍郎で、刑部右侍郎であつた吳壇とほぼ同格の中央高官であつた⁽³³⁾。

一件目の上諭には、「今、舒赫徳等が、觀保・蔣賜榮・吳壇を重ねて呼び出し、繰り返し訊問したところ、供述はいずれも真実を告げていないものの、恥じ恐れて心の内を表しているようであるという（今據舒赫徳等將觀保・蔣賜榮・吳壇復行提出、反覆研詰、雖供辭俱無指實、而愧悚已如見肺肝）」とあり、觀保らの取り調べの責任者となつたのは舒赫徳という人物であつたことがわかる。舒赫徳は滿洲正白旗の人、当時は武英殿大学士で軍機大臣も兼ねる大官であつた⁽³⁴⁾。ここに見える〈據〉は受け取つた文書の内容を記す際の書き出しに使われる文字である。

舒赫徳らは觀保以下三名を「重ねて呼び出し、繰り返し訊問した（復行提出、反覆研詰）」という。〈復〉は重ねて、繰り返しの意。〈提〉は罪人などと呼びついたり、連行したりする際に用いられる文字である。しかし、觀保らの供述は罪状を否認するものであつた。自供を得られなかつた舒赫徳らは、彼らが「恥じ恐れてすでに心の内を表しているようである（愧悚已如見肺肝）」という苦しい見立てでもつて、皇帝に取り調べの結果を報告した。

ここで乾隆帝は、観保らにかけた嫌疑を見直すにはいたらなかったものの、彼らが宦官と「内通・結託し、賄賂を使って私腹を肥やすような大きな弊害（交通結納、行賄營私大弊）」は起こしていないとして、事件の幕引きを図っている。この「交通結納、行賄營私大弊」というのは、『大清律例』の交結近侍官員律に「互相交結」「夤緣作弊」「内外交通」などの語があるのを踏まえた言説であろう⁽³⁵⁾。これは前引の高雲從に対する死刑判決文書の内容（こちらでは高雲從が銀両を受け取って記載を漏洩したことになっていた）とは矛盾するが、乾隆帝は強いてそこを突き詰めず、自らの恩徳でもって三人を釈放することにした。しかし全くの無罪放免とはならず、彼らには相応の処分が科された。

観保については、一件目の上諭の末尾に記されており、阿哥書房に出向させて贖罪させることとなった。〈阿哥〉は成人前の皇子である。具体的にどの皇子であったかまではわからないが、都察院の長官から幼年の皇子付の官に左遷されたことになる。なお、上諭には彼が「頂戴なき人（無頂帶人）」と記されている。〈頂戴（頂帶）〉とは官帽の頂に付す玉石を言い、その玉石は官品を表示する標識となっていた。官僚に対する処分の中には、この頂戴を取り除くというものがあり、ここから観保は以前に別の問題でこの処分を受けていたことがわかる⁽³⁶⁾。

蔣賜棨と呉壇について、乾隆帝は目を改めて具体的な処分を伝えた。そのうちの呉壇に関するものが、二件目の九月七日の上諭である。乾隆帝は呉壇について、「その刑名を処理することに習熟していることを考慮すると、官を罷めさせたり死刑に処したりするのは惜しいだろう（念其辦理刑名尙爲練習、若竟予廢棄未免可惜）」、すなわち遺棄するには惜しい人材であるという理由で刑部主事に降格して任用することにしたのである。なお、ここに見える〈竟予廢棄〉という字句についてであるが、前節で引用した『滿漢名臣伝』の呉壇伝はここを「竟于廢棄」としていた。これは上諭の「予」を、伝記側が「于」と誤記したものであろう⁽³⁷⁾。またここでは「廢棄」を罷免（廢）と棄市（棄）に解した。

二件目の上諭末尾の「なお革職留任として、八年咎がなければ、（革職の処分を）取り消すことを許す（仍帶革職留任、

八年無過、方准開復」についてであるが、まず〈革職〉は免官処分を指す語である。そして名目上、免官した上で引き続き官僚として任用することを〈革職留任〉という。原職に留まって任用されることが多いが、吳壇は刑部主事に降しての任用となった。〈開復〉は処分を取り消すことで、乾隆帝は今後八年罪過がないことを条件として、処分取り消しを認めることにした。なお、この上諭はほぼそのまま前引の『滿漢名臣伝』吳壇伝に引用されるが、この最後の一文だけは省略されている。吳壇は結局、この八年の経過を待つことなく、乾隆四十五年（二七八〇）に他界したのは前節で述べたとおりである。

現代語訳

乾隆三十九年九月二日。内閣が上諭を賜りました。觀保・蔣賜榮・吳壇は、大臣の身でありながら、分をわきまえて奉職することを知らなかった。觀保はみだりにあえて道員や知府の優劣を私的に議論した。蔣賜榮・吳壇は甚しいことに太監高雲從から記載を探った。彼らの罪はみな逃れることができないものである。幸いに朕が精神を励まして政治に努め、朝政を肅清している時に当たっており、彼等もあえて意に任せて妄りな行為に及ぶことはなかったが、もしそうでなかったら止まるところを知らなかったであろう。そこで厳しく審理・究明して、綱紀を正さねばならない。今、舒赫德等が、觀保・蔣賜榮・吳壇を重ねて呼び出し、繰り返し訊問したところ、供述はいずれも真実を告げていないものの、恥じ恐れて心の内を表しているようであるという。もとより法のもとでは許しがないところであるが、ただなお（宦官と）内通・結託し、賄賂を使って私腹を肥やすような大きな弊害を起こしてはいないことを考慮し、觀保・蔣賜榮・吳壇はみな恩を施して釈放させることにする。觀保は頂戴のない者であるので、なお阿哥書房に出向させ、力を尽くして贖罪させることにする。

乾隆三十九年九月七日。内閣が上諭を賜りました。呉壇の記載を探った一件については、ここに至るとは実に思いもよらぬことであった。ただその刑名を処理することに習熟していることを考慮すると、官を罷めさせたり死刑に処したりするのは惜しいだろう。呉壇は、恩を施して刑部主事として用いることにする。なお革職留任として、八年咎がなければ、(革職の処分を)取り消すことを許す。

『乾隆朝上諭檔』の「太監高雲從洩漏記載」関連史料が語る事件の顛末

本節では、高雲從の機密情報洩漏事件について、三件の檔案史料を紹介・解説してきた。そして『乾隆朝上諭檔』によると、乾隆帝はこの三件以外にも、乾隆三十九年(二七七四)七月下旬から九月月上旬にかけて本件に関わる多数の諭旨を発しており、当時の乾隆帝がこの事件に重大な関心を寄せていた様子がうかがわれる。本節では、とくに高雲從に対する死刑判決文書と、呉壇に対する処分が定まっていく過程の文書を取り上げたが、ここでは『乾隆朝上諭檔』に収録される他の関連史料もあわせて、この事件の顛末を概述しておきたい。なお、以下の文中の「No.1787」等は、『乾隆朝上諭檔』第七冊における史料の通し番号を示す。

乾隆帝が兵部右侍郎高樸を引見した際、彼は皇帝に「宦官のなかに官僚人事に関する硃批の記録を外廷に漏らしている者がいるとの風聞がある(風聞内監中有將記名人員硃批記載洩漏外廷之事)」と告げた。はじめは半信半疑であった乾隆帝は、ひとまず側近の大臣福隆安に命じて、より詳しく確認させると、高樸は都察院左都御史觀保・戸部右侍郎蔣賜棨・刑部右侍郎呉壇の名をあげ、彼らが九卿として勤務している時に道員や知府に関する記録の優劣を話していたと述べた。その後、乾隆帝は記録を管理していた宦官高雲從を面詰、すなわち皇帝自ら問いただしたところ、高雲從は蔣賜棨との関わりから于敏中の名もあげた。于敏中は当時、文華殿大学士と軍機大臣を兼ねていた大官であり、乾隆朝の重臣たちのなかでもかなりの大物であった。吃驚した乾隆帝から事情を問われた于敏中は、かつて高雲從より

頼み事をされたことがあり、それは断つたが、皇帝への報告を怠っていたとの釈明をした。これに対し乾隆帝は、官僚と宦官の間に交渉があれば、必ず報告すべきであるとし、于敏中については吏部にて処分を検討させることにした（これは後日、革職留任にて決着がついた⁽³⁸⁾）。事態を重く見た乾隆帝は、觀保・蔣賜榮・吳壇と、高雲從がやはり面識のある官僚として名をあげた倉場侍郎倪承寛の四名を革職とし、刑部の議に下すよう命じた（以上No.1808、乾隆三十九年七月二十三日上諭）。

その後、取り調べが進むと、高雲從と地方官とのつながりも露呈してきた。すなわち、高雲從の弟二人が山東臨清州の知州萬綿前と粵海關監督李文照の長随として雇われていることが判明したのである。乾隆帝は李文照を革職の上、北京に護送するよう指示した（No.1803, 1804、いずれも乾隆三十九年七月二十五日上諭）。そして臨清州の件については、当の知州は紹介を受けただけで、雇った人物の素性は知らなかったとして追及を免れたものの、その紹介者については二転三転し、高雲從の弟の供述によって山東按察使姚立德にまで累が及ぶことになった（No.1808、乾隆三十九年七月二十六日上諭。No.1844、乾隆三十九年八月十五日上諭）。

さて、自らの古巣である刑部で取り調べを受けることになった吳壇であるが、彼は弾劾された罪状を認めなかった。彼の供述は「署都察院左副都御史 永徳と江蘇の官員について話し、かつての属僚の賢否を広く論じておりました。もとより差し障りのあることではございません（與永徳談及江蘇官員之事、乃泛論舊日屬員賢否、原無關碍）」というもので、高雲從とのつながりについては否認した（No.1809、乾隆三十九年七月二十六日上諭）。②の一件目の上諭で見たように、同様の罪状で訊問を受けていた觀保と蔣賜榮も自供を肯んじなかった。このため刑部から拷問の許可を願ひ出る奏摺が出され、乾隆帝がこれを却下するところ一幕もあった（No.1813、乾隆三十九年七月二十九日上諭）。そして、吳壇たちの取り調べが膠着する一方で、事件の中心に置かれた高雲從は、前述のとおり福隆安らの奏摺に皇帝が裁可を与え、早々に処刑されてしまった（No.1814、乾隆三十九年七月二十九日旨。本節①）。その後、乾隆帝の万寿節である八月十三日が近

づいたころ、刑部は觀保・蔣賜榮・吳壇・倪承寬の四人を斬監候として奏上し、乾隆帝もこれに「議に依れ（依議）」と裁可を与えた。しかし八月二十二日になって乾隆帝は、刑部の上奏は「自供も罪状もはっきりしない（供罪未明）」ものであったとして、改めて供述を取るよう刑部に申しつけた（No.1850、乾隆三十九年八月二十二日上諭）。

このとき吳壇らに適用された律は、『乾隆朝上諭檔』にはこれを明示する記事を見出すことはできなかったが、演習に臨んでも言及した交結近侍官員律とみて間違ひなからう。ここには「およそ諸衙門の官吏、もし内官及び近侍人員と互いに結託して、『機密』事情を漏洩し、賄賂を贈って弊害をなし、『内外で内通し、事情を漏洩して』たすけあつて上奏し『それによつて機に乗じて迎合しよう』と図れば」、皆な斬「監候」とする（凡諸衙門官吏、若與内官及近侍人員互相交結、漏泄「機密」事情、賁緣作弊、「内外交通、泄漏事情」而扶同奏啓「以圖乘機迎合」者、皆斬「監候」）と規定され、この条に基づいて吳壇らを斬監候とする判決案が作成されたものと思われる。

ただ、この事件では高雲從が複数の官僚に取り入つて人脈を広げていたことは確かであろうが、事の発端となつた殊批の記録の漏洩についてはどうにも判然としない部分が残る。まず、最初の高樸の告発は「風聞」に発しており、乾隆帝も当初、この告発を「あいまいである（含糊）」と受け止めていた。しかしその後、皇帝自身が高雲從を面詰したところから一挙に事態が動き始め、綱紀の引き締めも意図してのことであろう、于敏中の処分や吳壇らの罪責追及を命じる上諭を中外大小臣工に通諭、すなわち朝廷の全ての官僚に宣示した（No.1787、乾隆三十九年七月二十三日上諭）。ところが前述の通り吳壇らは罪状の否認を続けたため、やがて乾隆帝は臣下を無辜の罪に問うたと人口に膾炙されることや、告発者である高樸の処遇などを気にしはじめた（No.1850、乾隆三十九年八月二十二日上諭）。結局、吳壇らは皇帝の恩徳によつて釈放され（No.1880、乾隆三十九年九月二日上諭。本節②）、個別に処分が言い渡されて本件は幕引きとされた。

なお、これは後日談となるが、朝廷の高官を複数巻き込んだこの事件のきつかけをつくつた高樸は、その後、葉爾

羌辦事大臣を拝命し、新疆のヤルカンドに駐在することになった。ここで高樸は多数の回民を使役して御禁制の玉石を採掘し、山西商人の豪商らと結託して巨利を上げるという大がかりな不正を働くことになった。この「高樸私売玉石案」は乾隆四十三年（一七七八）に発覚し、高樸は現地にて斬刑に処された。この「高樸私売玉石案」については、中国第一歴史檔案館編『乾隆朝懲辦貪污檔案選編』（中華書局、一九九四年）に章が設けられ、また專論として佐伯富「清代新疆における玉石問題」（同『中国史研究』第二、東洋史研究会、一九七一年）がある。高樸はもともと慧賢皇貴妃の兄弟の子という権門の出で、玉石案以前から素行に問題のある人物であったという。今となつては確かめる術もないが、吳壇らの罪状は高樸の妄奏に端を発する冤罪であった疑いも拭い去ることができないのである。

おわりに

本章では、まず第一節で清代の律例関連史料である吳壇『大清律例通考』から五刑律の律文とその由来を説いた按語を取り上げた。ここでは清代の法制史料としてとくに重要度の高い清律と、その編纂史を知る上での手がかりとなる吳壇の按語について、具体的な条文に基づく釈読を行った。

また第二節では、光緒十二年（一八八六）刊『大清律例通考』に附される吳重憲「律例通考校刊緣起」を全訳した。ここには清中期の官僚で律学家でもあった吳紹詩・吳壇父子の経歴、吳壇による『大清律例通考』の執筆、その原稿が清末に至って刊行される経緯などが記されていた。この節ではこの「律例通考校刊緣起」を釈読するとともに、伝記や年譜、檔案といった各種史料との突き合わせを行い、一つの史料から読み取れることとその限界を例示した。

続く第三節では、吳壇の経歴に大きな影響を与えた乾隆三十九年（一七七四）の「太監高雲從洩漏記載」事件に関する檔案史料三件を取り上げた。その三件のうち一件は即時執行の死刑判決文書であり、残りの二件は罪に問われた官僚を皇帝がその恩徳によって釈放しつつ処分を与える文書であった。ここでは皇帝周辺でやりとりされた刑罰や処分

に関わる史料の具体例を提示するとともに、個々の史料では断片的とならざるを得ない事件のあらましを整理した。

さて、すでに述べたように、呉壇は「太監高雲從洩漏記載」事件によって官歴に大きな傷を負うこととなった。當時まだ存命であった呉壇の父呉紹詩が、この事件について触れた記録が残されているので、本章の最後にこれを紹介したい。

七月、壇が宦官の口舌の事によって罪を獲て獄に下された。聖明なる天子のご賢察ご宥免を仰ぎ、その後ご恩によって釈放していただき、なお刑部主事として用いられた。余は熱河に赴いてご恩への感謝をお伝えしたところ、お召しになって応対いただくこと普段通りであり、さらに汝の子の事は汝には無関係であるとの論を賜った。余は皇上の慈恩に感激し、壇に、厳しく自ら汚名をそそぎ、奮身努力して、天子のご恩に報いよと訓戒した。

（七月、壇以寺人口舌事獲罪下獄。仰賴聖明鑒宥、旋予恩釋、仍用爲刑部主事。余至熱河謝恩、蒙召對如常、竝蒙諭汝子事於汝無涉。余感激聖慈、訓壇痛自湔洗、奮身努力、以答天恩（39）

このように呉紹詩は主に乾隆帝の寛大な処置への感謝と息子に対する訓戒について記している。呉紹詩は事件から二年後の乾隆四十一年（一七七六）に亡くなった⁽⁴⁰⁾。「厳しく自ら汚名をそそぎ、奮身努力して、天子のご恩に報いよ（痛自湔洗、奮身努力、以答天恩）」との訓戒は、呉壇にとって晩年の父から伝えられた遺命となるものでもあっただろう。呉壇は乾隆四十三年（一七七八）までに『大清律例通考』の原型を仕上げ、さらに新しい規定を追補しながら乾隆帝への献呈を企図していた。第二節では、これが「太監高雲從洩漏記載」事件による挫折を乗り越えようとする行動ではなかったかと推察したが、奮身努力して、乾隆帝が認めた才智を傾けた書物を書き上げて献呈し、自らの命を救った皇帝の恩に報いるという筋書きは、彼の父が遺した訓戒に沿うものでもあった。皇帝から施された恩と大きな挫折、そ

して亡父の戒め、吳壇はこれらに導かれ発奮して『大清律例通考』の執筆に取り組んだように思われるのである。

註

- (1) 清の律例については、滋賀秀三『中国法制史論集——法典と刑罰——』第二章（創文社、二〇〇三年）、谷井俊仁「清律」（滋賀秀三編『中国法制史——基本資料の研究——』東京大学出版会、一九九三年）、拙稿「清代刑事裁判関連史料」（山本英史編『中国近世法制史料読解ハンドブック』東洋文庫、二〇一九年）、谷井俊仁・谷井陽子訳解『大清律刑律——伝統中国の法的思考——』一、二（平凡社、二〇一九年）等を参照。
- (2) 『大清律例通考』原文「刑者例也、成也」。『唐律疏議』名例・答刑五・疏議も同じ。『礼記注疏』王制は「刑者例也、例者成也」とするが、ここは原文のまま読む。
- (3) 『大清律例通考』原文「薄刑用鞭朴」。新釈漢文大系『国語』上、一三七頁により「薄刑用鞭朴」に改める。
- (4) 『大清律例通考』原文「任之以事、實以圜土、而收教之。上罪三年而捨、中罪二年而捨、下罪一年而捨」。『唐律疏議』名例・徒刑五・疏議も同じ。『周礼注疏』秋官・司圜は「任之以事而收教之。能改者、上罪三年而捨、中罪二年而捨、下罪一年而捨」とするが、ここは原文のまま読む。
- (5) 『大清律例通考』原文「公族有死罪」。『唐律疏議』名例・死刑二・疏議も同じ。『礼記注疏』文王世子は「公族其有死罪」とするが、ここは原文のまま読む。
- (6) 「全国漢籍データベース」(<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>) および「Cinii Books」(<https://ci.nii.ac.jp/books>) による。いずれも二〇二三年三月検索。
- (7) 張偉仁主編『中国法制史書目』一（中央研究院歷史語言研究所、一九七六年）三九頁。
- (8) 唐律の五刑については律令研究会編『訳註日本律令』五・唐律疏議訳註篇（東京堂出版、一九七九年）の名例一を参照。また、明律・清律の五刑については、石岡浩・川村康・七野敏光・中村正人『史料からみる中国法史』（法律文化社、二〇一二年）六〇～六二頁を参照。同書によると、清は「唐が滅亡したあとの王朝のなかでは、唐律の五刑をもっとも忠実に再現していた」という。
- (9) 清代の刑罰の概要については中村茂夫『清代刑法研究』（東京大学出版会、一九七三年）一二～一三頁、滋賀秀三『清代中国

の法と裁判』（創文社、一九八四年）四〇～四一頁註五三を参照。

- (10) 徒刑・流刑についてはキム・ハンバク『配流刑の時代——清朝と刑罰——』第一部（京都大学学術出版会、二〇二二年）を参照。

- (11) 秋審については拙稿「秋審勾決考」（『社会文化史学』四十、一九九九年）、同「清代地方秋審の手続と人犯管理」（『史学雑誌』第一一〇編第六号、二〇〇一年）、朝審については赤城美恵子「可矜と可疑」（『法制史研究』五四、二〇〇五年）、同「緩決の成立」（東京大学『東洋文化研究所紀要』第一四七冊、二〇〇五年）などを参照。

- (12) 中村前掲『清代刑法研究』一一頁。

- (13) 前掲拙稿「清代地方秋審の手続と人犯管理」では、有司決囚等第律に附されるいくつかの条例の編纂経緯について、『大清律例通考』も参照しつつ検討した。

- (14) 秦國経主編『中国第一歴史檔案館藏清代官員履歷檔案全編』七（華東師範大学出版社、一九九七年）三二八～三三〇頁。

- (15) 魏秀梅編『清季職官表 附人物録』（中華書局、二〇二二年）九七六頁。

- (16) 北京図書館編『北京図書館蔵珍本年譜叢刊』九七（北京図書館出版社、一九九九年）所収。

- (17) 清代の伝記史料については、馮爾康『清史史料学』第八章（台湾商務印書館、一九九三年）、同『清代人物伝記史料研究』（商務印書館、二〇〇〇年）を参照。明清時代の人物についての調べ方については、本書第五章「明末の水利紛争をめぐる士大夫の書簡——郝敬『山草堂集』より——」と第六章「殺人誣告が赦される時——『守邦近略』所載の判牘——」も参照されたい。

- (18) 民国『無棣県志』巻十・人物・名宦には、呉自肅以来の海豊呉氏一族の伝が複数収録されている（海豊県は一九一四年に無棣県に改名された）。この『無棣県志』は、中国方志叢書・華北地方・山東省の一部として影印出版されている（成文出版社、一九六八年）。

- (19) 『滿漢名臣伝』漢名臣伝巻三十一・呉紹詩列伝。

- (20) これに該当する『乾隆朝上諭檔』所収の上諭（第三節に掲出する）は、「若竟于廢棄未免可惜」の「于」を「予」とする。『滿漢名臣伝』側の誤記であろう。

- (21) 據頭など檔案史料に見られる書式については山本英史「清代檔案史料」（前掲『中国近世法制史料読解ハンドブック』）を参照。

- (22) 福隆安の伝は『国朝耆獻類徵初編』巻九十三、『清史稿』巻三百一に載る。

- (23) 努三の伝は『滿漢名臣伝』滿洲名臣伝卷四十八、『国朝耆獻類徵初編』卷二百八十九、『清史稿』卷三百十六に載る。
- (24) 扎拉豐阿の経歴は『清史稿』卷二百九・藩部世表・喀喇沁部・扎薩克多羅貝子、御前大臣への任命は同卷十三・高宗本紀に載る。
- (25) 杉山清彦『大清帝国の形成と八旗制』（名古屋大学出版会、二〇一五年）二一四～二一七頁。
- (26) 崔應階の伝は『国朝耆獻類徵初編』卷七十四、『清史稿』卷三百九に載る。
- (27) 檔案の書式や特有の言い回しについては、雷榮広・姚楽野『清代文書綱要』（四川大学出版社、一九九〇年）、張我徳・楊若荷・裴燕生編著『清代文書』（中国人民大学出版社、一九九六年）、山本前掲『清代檔案史料』を参照。植田捷雄ほか編『中国外交文書辞典（清末篇）』（学術文献普及会、一九五四年）、山腰敏寛編『中国歴史公文書読解辞典』（汲古書院、二〇〇四年）なども参考になる。
- (28) 『乾隆朝上諭檔』第七冊、No.1787。
- (29) 『大清律例』卷十九・兵律・軍政・漏泄軍情大事律。
- (30) 一方、死刑の執行をしばらく猶予する監候の判決については、前掲拙稿「清代刑事裁判関連史料」にて紹介しているので合わせて参照されたい。
- (31) 『乾隆朝上諭檔』第七冊、No.1787。
- (32) 本章の「おわりに」に引く吳紹詩『蟻園日記年譜』にも「獲罪下獄」との記事が見える。
- (33) 観保と蔣賜榮の官職については錢実甫『清代職官年表』（中華書局、一九八〇年）を参照。
- (34) 舒赫徳の伝は『国朝耆獻類徵初編』卷二十二、『清史稿』卷三百十三に載る。
- (35) 『大清律例』卷六・吏律・職制・交結近侍官員律「凡諸衙門官吏、若與內官及近侍人員互相交結、漏泄「機密」事情、夤緣作弊「内外交通、泄漏事情」而扶同奏啓「以圖乘機迎合」者、皆斬「監候」」。
- (36) 『滿漢名臣伝』滿洲名臣伝卷四十七・観保列伝によると、観保は乾隆三十七年二月に経筵での不手際から「革去頂帶」を命じられている。
- (37) 第二節で見た吳紹詩の出仕の件と同様に、こちらも大本の記録（国史館の伝稿）で誤記が生じていた可能性もある。
- (38) 張偉仁主編『中央研究院歴史語言研究所現存清代内閣大庫原藏明清檔案』第二二一冊（中央研究院歴史語言研究所、一九九一

年) A221-138°

- (39) 吳紹詩『蟻園自記年譜』甲午(乾隆三十九年)の条。
- (40) 吳紹詩の没年は『蟻園自記年譜』の末尾に附される吳垣・吳壇の識語に記される(吳垣は吳壇の兄)。